

特別寄稿

名古屋学院大学・人間健康学部専任講師の大澤史伸氏は、現在「農業分野における障害者の就労支援」をテーマとして研究を続けております。今回、共働学舎新得農場において障害者就労を進めながら生産活動をしている実態について「特別寄稿」がありましたので、以下掲載いたします。

北海道『共働学舎新得農場』の理念と実践

— 障害者と共に生きる農業事業体を目指して —

名古屋学院大学 講師 大澤 史 伸

大澤 史 伸（おおさわ しのお）氏

生 年…一九六六年、千葉県生まれ
学 歴…酪農学園大学酪農学部酪農学科卒業
専修大学大学院文学研究科社会学専攻修了

専門分野…障害者福祉

【職歴】

厚生労働省知的障害児施設 国立秩父学園 児童指導員

東海大学健康科学部社会福祉学科助手

聖隷クリストファー大学社会福祉学部社会福祉学科専任講師
現在、名古屋学院大学人間健康学部人間健康学科に勤務（専任講師）

はじめに

国は、「障害者基本法」第九条に基づき、障害者のための施策に関する基本的な計画を策定することが義務づけられている。「障害者基本計画」。同基本計画は、二〇〇三年から二〇一二年までの十年間を計画期間として、障害のある人が、社会の対等な構成員として人権を尊重され、自己選択と自己決定の下にあらゆる活動に参加・参画できる社会の実現を目指し、計画期間中に講ずべき障害者施策の基本的方向について定めている。特に、二〇〇八年からの「重点施策実施五カ年計画」の中の雇

用・就業では、障害者の能力や特性に応じた働き方の支援として、農業法人等への障害者雇用の推進を挙げている。

「21世紀新農政二〇〇八」（食料・農業・農村政策推進本部決定）の中では、集落営農を支える人材の確保や農業法人等への雇用による就業の促進に向けた支援を行うとともに、女性、高齢者、障害者等の多様な人材が活躍できる環境づくりを推進することがうたわれている。

ここでは、障害者就労を進めながら一億円を超える売り上げをしている北海道新得町にある「共働学舎新得農場」の経営とその生産活動を支える理念について報告をする。

「共働学舎」は、一九七四年、宮嶋眞一郎が、心や体に不自由を抱え

る人達と数人の仲間によって、長野県小谷村で始めた独立自活を目指す教育社会、福祉集団、農業家族である。現在、全国に五カ所あり、約二〇人のメンバーが生活をしている。

なお、本文では、共働学舎全体のことを説明するときには「共働学舎」、「共働学舎新得農場」のことを説明するときには「新得農場」と記述する。

一、「新得農場」代表者・宮嶋望

宮嶋望は、「共働学舎」創立者・宮嶋真一郎の長男として、一九五一年に東京で生まれる。一九七四年三月に、自由学園最高学部を卒業。宮嶋は、この自由学園最高学部で放射線物理学を学び、卒業研究では森林の植物生態学、具体的には、植生遷移をシミュレーションするコンピュータソフトを作っていた。

宮嶋は、一九七四年四月に米国ウイスconsin州のブラウンスイス牧場 Voegel Farm で二年間酪農実習を行う。一九七六年六月米国ウイスconsin 大学の畜産学部酪農学科に入学、一九七八年六月 Dairy ScienceBS を取得して卒業。

「新得農場」は、宮嶋夫妻が二六歳の時に、二歳の娘と登校拒否の子供や精神障害を持った青年等六人で四番目の「共働学舎」としてスタートした。

二、「新得農場」の理念

(一) さまざまなメンバーでの生活

「共働学舎」の理念として、それぞれの持味、特徴、能力をもって協力すれば、自分達で力のできる場所がつくってゆけると考えている。したがって、この考え方に共鳴するか、あるいは、このような生活を希望するならば誰でもメンバーとなることができる。「新得農場」では、メンバーが約六〇名いる。現在、何らかの障害（身体障害、知的障害、精神障害、発達障害）があることにより、障害者手帳を所持している人は九名である。

(二) 職階制のない組織

「共働学舎」では、福祉施設のように、指導員、保育士、栄養士、調理師、事務職等という肩書きは存在しない。つまり、誰かが誰かを管理するという関係がないことになる。必要に応じて、メンバーの個性と能力に応じて全員で責任を分かち合い、問題解決を行っていくという関係を見ることが出来る。メンバーは各仕事を通して、自分にあつた仕事を見つけ、それを行っている。

(三) 手作りの生活

「共働学舎」では、農村の自然の中で、農業と工芸を主体とする生産

的勤労生活をしている。「新得農場」では、畑作物は Bio dynamic（バイオ・ダイナミック）農法で野菜を作り、帯広、札幌、東京等、日本全国に送られていく。一九九二年には新しい牛舎とチーズ工房が建設され、本格的に良質のチーズ製造を始めた。この畜産、農産に加えて、とうもろこし人形、織物、手工芸、家具作り、ケーキ作り等も行われている。また、食卓に上がるものの大半が農場で取れたものである。不足しているのは米と魚ぐらいである。

三、「新得農場」の事業の特徴

(一) ブラウンスイス牛の導入

「新得農場」の飼養牛はその約六割が「ブラウンスイス」である。宮嶋は、ブラウンスイスの利点について、①体格は大きくホルスタインに混入が可能である、②乳質がよく、成分率が高い。特に蛋白が高く、これからの乳価体制で有利である、③蛋白質の中の凝固カゼインの率が高く、チーズの歩留まりがよい、④チーズの熟成に適した乳質で、扱いやすい、⑤乳牛としては癖があるが知ってしまえば、扱いやすい、⑥どちらかというとおとなしく人なつつかいウシらしい牛種である、⑦牛肉としても高い評価が得られる、ことを挙げている(1)。

表 「新得農場」の概要

2008年12月31日現在	
(1)立地	十勝平野の北西、東向きのだらかな丘陵地
(2)作目規模	家畜用飼料畑（無農薬栽培） 43.8ha 野菜・作物畑（無農薬有機栽培） 2ha
(3)飼養頭数	乳牛 ブラウンスイス（成牛32頭 育成牛18頭） ホルスタイン（成牛30頭 育成牛19頭） 肉牛 ブラウンスイス（肥育牛8頭 育成牛6頭）
(4)その他家畜	ブタ（肥育豚13頭）、ニワトリ（採卵60羽）、 ヒツジ（15頭）、ウマ（1頭）
(5)収入合計	（家事消費、共済・奨励金他含む）：170,897千円
（内訳）	
①生産収入	農業収入（酪農、卵、肉、養豚、畑作売上） 38,193千円（2008年）
②加工売上	（チーズ売上） 113,507千円（2008年）
③その他	（ケーキ、パン、工芸、炭埋、ミント交流館） 13,417千円（2008年）
(6)飼料基盤	牧草採草地38ha デントコーン5.8ha 放牧地 22ha
(7)構成員	約60人（共働学舎内部約40人、外部約20人）
(8)酪農歴	30年目

(二) 独自の農法を導入

①牛舎や他の施設の下に炭を埋め、マイナスイオンを供給した。
②飼料に土壌菌（アース・ジエネター）を配合。
ウシの餌に土壌菌を投与することで、ウシの体内で菌が繁殖をする。このことにより、ウシの胃の中を出来るだけ野生に近づけるようにした。その結果、糞の臭いが減少し、ウシの生理活性も改善された。

③スタンチオンヤストールをはずし、ルーズバーンにし、発酵牛床にした。

「新得農場」では、ウシをつなぎ止めるようなことはしていない。そして、ウシのいるところは発酵牛床である。発酵牛床では微生物による分解が進むので臭いがなく、ハエが湧かない。さらに、牛床での発酵により牛舎環境と牛体双方に免疫力を発揮し、雑菌、病原菌を抑える拮抗力を持つことができる。

④自然の傾斜を利用した自然流下式の牛乳搬送。

「新得農場」では、牛舎とチーズ工房が隣接している。生乳はポンプを使わずに、搾乳室から床をだんだん低くしていくつて段差で自然に流れるように設計をされている。これは、生乳の温度変化もなく、ウシの体温とほぼ同じ三六〜三七℃の温度を保つたままチーズパットにたまるようにできる仕組みである(2)。これにより、良質のチーズを製造することができる。

(三) 海外に通用するチーズ製造

宮嶋は、一九八九年、十勝の農業の将来を見据えるためにヨーロッパへ視察に行った時に、AOC(原産地呼称証明制度)チーズ協会のJean Huber会長に会い、翌年、十一月には、Jean Huberを招き、「第一回ナチュラルチーズサミットin十勝」を開催した。第三回からはフランスの技術者を呼び、製造技術、衛生管理技術、官能評価法、コンクールのシステム作り等について十五回にわたり毎年サミットを開催した。二

〇〇五年六月には帯広で「コミテ・プレニエ・フロマージュ」のナチュラルチーズの国際会議を開催した。

「新得農場」では、世界で通用するチーズ製造を行うために、積極的に米国やヨーロッパへの人脈作りをして、その成果をチーズ製造に生かしていることが分かる。このような努力により、「新得農場」の製造したチーズは世界の大会で数々の受賞をしている。

四．「新得農場」の課題と今後の展望

「新得農場」という組織形態は、一般企業とは異なる。なぜなら、企業というものは、生産性という問題を第一に考えるからである。そのため、多くの企業は生産性を上げるために、作業能力の高い従業員を採用し、作業工程にできるだけ機械化を導入するなどして経営の合理化を図ることが多い。しかし、その一方で、作業能力の低い人々は切り捨てられる場合がある。「新得農場」では、そのような人々に対しても積極的に門戸を開いている。そのことは経営面では厳しい状況に置かれることになる。

「新得農場」で最も売上を上げているチーズ工房で働くメンバーのほとんどが将来、自分でチーズ工房を経営することを希望している。いずれは「新得農場」を離れる可能性が高いといえる。そのことは世界に通ずるチーズ作りの技術者という人材を失うことにもつながる。これは「新得農場」にとっても大きな損失になると考える。一方で、「新得農

場」で生活することを希望する様々なハンディキャップを持つ人々は増加する傾向にある。

このような状況の中で今後、「新得農場」はどのような対策を建てていくのが課題となる。宮嶋は、その解決を「ソーシャルファーム」に求めている。「ソーシャルファーム」とは、社会的な(Social)企業(Firm)であり、利潤を追求するのではなく、社会的な目的を実現するための企業である。一九七〇年代にイタリアで始まったのが最初である。近年、ヨーロッパでは、「ソーシャルファーム」の普及が著しい。



①炭と微生物を生かした木造牛舎（内部）



②自然の傾斜を利用した牛乳運搬
(右奥：牛舎、左奥：搾乳舎、左手前：チーズ工房)

写真 「新得農場」の事業の特徴

我が国では、二〇〇八年十二月七日に「ソーシャルファーム」の経営などを支援する任意団体「ソーシャルファームジャパン」(S F J)が立ち上がった。初代理事長は元環境省事務次官の炭谷茂・恩賜財団済生会理事長が就任している。宮嶋は副理事長に就任した。

「新得農場」は、様々な障害を持つメンバーが共に暮らしている共同体である。そこでは、理念に基づく経営というものが必要になってくる。収益重視の経営ではなくて、あくまでも中で生活をしているメンバーに合わせたシステムを構築しつつ、収益活動を行うことがその基本姿勢である。その実現のために、今後、「新得農場」は「ソーシャルファーム」を目指すことにしている。

【引用文献】

- (1) 宮嶋望 「成牛42頭・育成24頭、ブラウンスイス種・チーズ加工」(『農業技術体系畜産編』、農山漁村文化協会、一九九六年) p. 11.
- (2) 塩川恭子 「ほんものは手がかかる北海道十勝平野、共働学舎の生命力あふれるチーズづくり」(『食の科学』No.273、光琳、二〇〇〇年) p. 40.

謝辞

本調査にご協力を下さいました「共働学舎新得農場」の宮嶋望・京子ご夫妻をはじめ全てのメンバーの方々に心より感謝いたします。